

「 神様の畑、建物 」

中高校長 湯口 隆司

みなさんおはようございます。今年度より校長として皆さんと学校生活を共にすることになった湯口隆司と申します。この春休みに東京から長崎にやってきました。今年の春休みの期間に、東日本は大震災とそれに続く原発事故で、その地域にすむ大変多くの人々は今このときに試練のただ中におります。深い悲しみの中で私たちもこの時期を迎えています。私の故郷は茨城と福島との県境にある町で、そこに母親が一人で3月末まで暮らしていました。しかし原発事故で、高い放射能による汚染がその町で報じられることになりました。



母親は長年親しんだ土地と近隣の仲間から離れるのを嫌がりましたが、緊急事態にすぐには長崎から動けないからと説得し、姉の住む平塚にとりあえず車に積めるものだけを積み込みこみ引越しをしました。その2日後に長崎に赴任しました。

80半ばの母にとっては何十年も住み慣れた土地と家を一時的ではあれ離れることはつらいことでした。家を離れるときの悲壮な面持ちは今でも私の脳裏をかすめます。

さて、本年度の選ばれた学院聖句も土地と建物に触れられています。私たちが「神さまの畑であり、建物である」という内容です。通常、私たちは私の母親のように、土地と家に無意識にも深い愛着によって結ばれ暮らしています。しかしこの聖書箇所は、実に土地と建物への通常の発想から考えもつかない別の角度からこれらを見るのです。

それはこの聖句の後の「私たちは神からいただいた恵みによって土台を据え、他の人がその上に家を建てている」からも明らかでしょう。しかし、聖書はその土台である神の「恵み」を忘れたものは「愚かな者」であり、知っているのと誇っているものは、無知の知を知れといっているのです。

今回の震災で家族や家を失った方々には心からの神様による慰めを祈らずにおれませんが、同時に原発の事故による放射能の汚染で私たちは初めて、作物を成長させる土地、また人間が生きるための糧や全地球的な自然環境の保全に一役買っている海の存在の大きさとその恵みの偉大さを、特に東日本の人々は改めて日々の生活の中で見出しています。

震災と原発事故からの立ち直りには長い時間がかかりそうですが、今年度の始業に当たり、そのことで私たちが何を考え、何をしたらよいのかという問いを、一人ひとり痛みを感じつつ考えてみるべき年になったと思います。私たちのこの体と精神も、実は神様の恵みと神への賛美を表現する器であるという今年度の聖句を、一年間を通して自分自身の課題として共に考えていきたいと思えます。

以上で、2011年度始業式の挨拶といたします。